

## 英語法助動詞の意味論(5)

中 野 弘 三

### 2. 法助動詞の意味特性

#### 2.1. 多義性

法助動詞の名称はそれが表す意味が法性であることに由来する。英語における法性を表す表現(法表現)には、法助動詞以外にも, possibly, probably, maybe, certainly などの法副詞, be possible, be necessary, be certain, be likely のような法形容詞のほか, be permitted to, be allowed to, be obliged to, be required to, be able to, be going to, be willing to, be liable to など様々な表現がある。これら法表現が表す法性は、本稿では、Palmer (1979) に従って、認識的法性 (epistemic modality) (§ 1.1.3.1. 参照), 義務的法性 (deontic modality) (§ 1.1.3.2. 参照), 動的法性 (dynamic modality) (§ 1.1.3.3. 参照) の三種に分類する。英語の法助動詞の特色は、その他の法表現がこれらの三種の法性の一つしか表せないのに対し、法助動詞のほとんどが各々二つないしは三つの種類の法性を表し得ることであり、これを本稿では法助動詞の多義性と呼んでいる。たとえば, possibly という法副詞は認識的法性のみを, be permitted to は義務的法性のみを, be possible to は動的法性のみを表すのに対し, may, must などの法助動詞は、認識的、義務的、動的法性のいずれも表すことができる。<sup>1)</sup>

(2.1) a. *Possibly* he is serious. (多分彼は本気だろう) [認識的法性]

b. You *are permitted to* stay here. (君はここにいることが許可されている)  
[義務的法性]

c. It *is possible to* use the word as a noun. (その語を名詞として用いることができる) [動的法性]

(2.2) a. He *may* be serious. (彼は本気かもしれない) [認識的法性]

1) 因に, be able to, be going to などの準法助動詞も動的法性のみ表し, 認識的法性や義務的法性は表さない。ただし, 準法助動詞の have (got) to は認識的, 義務的, 動的法性のいずれも表すことができ, その機能は純粹の法助動詞のそれに近づいている。

i) This *has (got) to* be (=I am sure it is) the most stupid film I have ever seen. —  
[Alexander 1988] [認識的法性]

ii) I *have (got) to* (=am required to) go to a meeting. [義務的法性]

iii) It *has (got) to* be done (=It is necessary to do it) by tomorrow. [動的法性]

- b. You *may* stay here. (君はここにいてよい) [義務的法性]  
 c. The word *may* be used as a noun. (その語は名詞として用いることができる)  
 [動的法性]

- (2.3) a. He *must* be mad. (彼は気が狂っているにちがいない) [認識的法性]  
 b. You *must* stay here. (君はここにいないといけない) [義務的法性]  
 c. I will come if I *must*. (来る必要があるなら、来ます) [動的法性]

法助動詞の多義性には、このような法性の種類に関する多義性以外に、もう一つ別の多義性がある。それは語用論的多義性とでもいうべきもので、義務的法性や動的法性を表す法助動詞が特定の文脈で用いられた場合に、その法助動詞を含む文がある種の発話の力 (illocutionary force) を持つ間接的発話行為 (indirect speech act) を遂行し、それが慣用化した場合に、法助動詞がその発話の力を自らの語義の一つに取り込むことから生じる多義性である。たとえば、「能力」、「可能」、「許可」の意の動的法性、義務的法性を表す *can* を含む文は、次のような場合に、i) <申し出> (offer), ii) <依頼> (request) または <命令> (order), iii) <勧告> (suggestion) といった (発話の力を持つ) 発話行為を間接的に遂行する。<sup>2)</sup>

- i) <申し出>——聴者がして欲しいと願っていると思われる行為を、話者が自ら「できる」と主張するか、「そうしてよろしいか」と聴者に許可を求める場合に生じる発話の力: I *can* do the shopping for you, if you're tired. (お疲れでしたら買い物をして差し上げますよ) / Can I carry your suitcase? (スーツケースをお持ちしましょうか)  
 ii) <依頼>または<命令>——話者がして欲しい行為を聴者が「できる」と主張するか、聴者にそれが「できますか」と質問する場合に生じる発話の力: You children *could* help me move these chairs. — [Quirk, et al. 1985] (君たち、このイスを運ぶのを手伝ってくれないかね) / You *can* stop lying now. (嘘もいい加減にしろ) / Can you come here, please? (こちらに来てくださいますか)  
 iii) <勧告>——聴者がしたほうがよいと考える行為を、話者が聴者に向かって「あなたはそれができる」と主張する場合に生じる発話の力: You *can* certainly give me a ring back this afternoon — there might be something. — [Palmer 1979] (今日の午後必ず電話をかけておいでよ。何かあるかもしれないから)

このように、*can* を含む文が、話者 (または聴者) がして欲しいことを聴者に「できる」と主張

2) 「能力」、「許可」の意の *can* を含む文が、なぜ間接的に<申し出>、<依頼>、<勧告>といった発話行為を遂行し得るかというのは、間接的発話行為の問題であるが、この問題に関する理論的考察については Scarle (1975), Bach and Harnish (1979), Van der Auwera (1980), Allen (1986, Ch. 8) などを参照。

したり、「できるか(してよいか)」と尋ねたりすることにより、〈申し出〉、〈依頼(命令)〉、〈勧告〉といった発話行為を(間接的に)遂行するのに頻繁に用いられると、〈申し出〉、〈依頼(命令)〉、〈勧告〉という発話の力は、can の慣習的用法として、その語義の一部とみなされるようになる。事実、一般の辞書や文法書においては、しばしば、このような発話の力が can の語義として扱われている。法助動詞のこのような語用論的含意を、認識的法性、義務的法性、勧助的法性という法助動詞の本来的(意味論的)語義と同性質のものとして扱うことは理論的に正しくない。しかし、法助動詞のこのような語用論的含意は、発話が行われるその場かぎりの、臨時的な意味ではなく、法助動詞特有の慣用的な意味である。このことは、*Can I carry your suitcase?* が〈申し出〉の発話の力を持つのに対し、同じ「能力」の意を持つ *be able to* を用いた

(2.4) *Am I able to carry your suitcase?*

は〈申し出〉表現にはなり得ない(または極めて不自然な〈申し出〉表現である)ことから明らかである。したがって、法助動詞の語用論的含意(そしてその多義性)は法助動詞特有のものであり、本稿では後に特別に考察する。

2.2. 話者指向性 (speaker orientation)

*seem*, *appear* など若干の法動詞(認識的法性を表す動詞)を除いて、一般に本動詞は主語の行為や状態を表す。たとえば、

- (2.5) a. *John went to London.*  
b. *John loves Mary.*

における本動詞 *go*, *love* は主語 *John* の行為や状態を表し、それ故、これらの本動詞の意味は主語指向的 (subject-oriented) であると言える。これに対し、

- (2.6) a. *John may love Mary.* (ジョンはメアリーを愛しているかもしれない)  
b. *You may go home.* (家にかえってもよろしい)

における認識的用法、義務的用法の法助動詞 *may* は主語の *John*, *you* の行為や状態を表すものではなく、話者の推量、話者の(聴者に与える)許可を表している。この意味で法助動詞は話者指向的な意味を表すと言える。話者の推量を表す認識的用法の法助動詞はすべて話者指向的で

ある。

(2.7) You *can/must/should* go home. (=I permit/require/advice you to go home.)

における義務的用法の法助動詞も、パラフレーズから明らかな通り、話者指向的である。ただし、法助動詞の表す意味が常に話者指向的であるわけではない。たとえば、

(2.8) a. John *can* speak French.

b. Oil *will* float on water.

の *can* や *will* のように、主語の能力や習慣を表す動的用法の法助動詞は、主語指向的であって、話者指向的ではない。また、上に示した義務的用法の法助動詞では、パラフレーズからわかるように、義務の源が話者であることから話者指向的であると言えるが、

(2.9) a. You *can* smoke in here. (=You are permitted to smoke in here.)

b. *Must* I go? (=Do you want me to go?)

における *can* や *must* の義務の源は話者以外のもの（前者の場合は何らかの規則、後者の場合は聴者）であるので、ここでの *can*, *must* は話者指向的ではない。<sup>3)</sup> なお、義務的用法の法助動詞が話者指向的である場合には、(2.7) のパラフレーズから明らかなように、〈許可〉、〈要請〉、〈勧告〉といった発話行為も遂行するところから、§1.1.3.2. でも述べたように、遂行的 (performative) という特性を持つと言える。他方、話者指向でない義務的法助動詞はそのような発話行為は遂行せず、非遂行的である。同様に、動的用法の法助動詞はすべて非遂行的である。

### 2.3. 命題指向性 (proposition orientation)

*seem*, *appear*, *happen*, *come* など Quirk, et al. (1985) が連結動詞 (catenative) と呼ぶものを除いて、一般の動詞は、上述のように主語指向的な意味を表す。これに対し、法助動詞は、主語についてでなく、文の命題内容について何かを述べるのに、すなわち、命題指向的 (proposition-oriented) に用いられることが多い。認識的用法の法助動詞はすべて、話者指向的

3) 義務的用法の *may*, *must* が平叙文で用いられた場合はその義務の源は話者であるのに対し、疑問文で用いられた場合にはその義務の源が聴者になるので、このような用法の *may*, *must* を「談話指向的」 (discourse-oriented) と呼ぶ人もある (cf. Palmer 1974, §5.1.3)

であると同時に、命題指向的である。たとえば、

- (2.10) John *may/must/will* be there. (ジョンはそこにいるかもしれない／にちがいない／だろう)

における認識的法助動詞は「ジョンがそこにいる」という命題内容の事実性に関する話者の判断を表す。また、動的用法の法助動詞の場合も命題指向的な意味で用いられることが多い。Palmer (1979) は動的用法の法助動詞を主語指向的 (subject-oriented) な意味を表すものと、中立的 (neutral) な意味を表すものの二つに分類する (§ 1.1.3.3. 参照) が、後者の類に属するものはすべて命題指向的である。動的用法の法助動詞で、

- (2.11) a. John *can* speak Japanese.  
b. John *will* often sit up late at night.

のように、主語 (John) の特性を述べる主語指向的な法助動詞は、能力の意の *can* や習性／特性を表す *will* など少数のものに限られている。むしろ、動的用法の法助動詞は、多くの場合、次の (2.12) に見るように、中立的な意味、すなわち、命題指向的な意味を表すのに用いられる。

- (2.12) a. There *can* be no connection between the two persons. (二人の間にはどんな関係もあり得ない)  
b. It *may* be said that he is a great scholar. (彼は大学者だと言える)  
c. It *needn't* be done. (それをする必要はない)

ここでは法助動詞が文の主語の特性ではなく、文の表す事柄 (命題内容) の存在や発生の可能性／必要性を述べていることに注目されたい。

命題指向的な法助動詞には二つの統語上の特徴が認められる。一つは (2.12) に見るように、形式主語の *there* や *it* を取る点である。認識的用法の法助動詞も当然この特徴を共有する。

- (2.13) a. There *may* be no fuel left. (燃料は残っていないかもしれない)  
b. It *must* be true that he is a swindler. (彼が詐欺師であることは本当にちがいない)

主語の特性を述べる主語指向的法助動詞がこのような形式主語を取り得ないことは言うまでもない。命題指向的法助動詞のもう一つの特徴は態中立的 (voice-neutral) であることである。認識的用法及び中立的用法の法助動詞を含む文は、次に示すように、能動態と受動態の間で (主題的意味<sup>4)</sup> 以外の点で) 意味上の相違がない。

- (2.14) a. The cat *must* have killed the rat.  
       = b. The rat *must* have been killed by the cat.

- (2.15) a. John *may* love the girl.  
       = b. The girl *may* be loved by John.

- (2.16) a. We *can/may* use the word as a verb.  
       = b. The word *can/may* be used as a verb.

義務的用法の法助動詞に関しては、態中立的でないと思われる場合と態中立的と思われる場合の両方がある。たとえば、義務的用法の *may/must* を含む

- (2.17) a. You *may/must* help John. (=I permit/require you to help John.)  
       = b. John *may/must* be helped by you. (=I permit/require John to be helped by you.)

を比較すると、許可／義務を与えられているものが (2.17.a) では you であり、(2.17.b) では John であるので両者の意味は異なり、この場合は態中立的でないと言える。しかし、

- (2.18) a. You *may/must* do it.  
       b. It *may/must* be done by you.

の場合のように、受動文の主語が許可／義務を与え (課し) 得ない無生物の場合には、能動文、受動文の間に大きな意味の相違は認められず、ここには態中立性が存在するものと考えられる。また、義務的用法の法助動詞は形式主語の *there* や *it* と共に用いることもできる。

4) 主題的意味 (thematic meaning) とは、Leech (1974, 1981<sup>2)</sup>) の用語で、何を主題 (theme) にして述べるか、という文の構成法によって伝えられる伝達内容をいう。主題を明示するには、英語では語順、音調による強調などの手段が用いられる。(2.14)~(2.16) の能動文と受動文の間には伝えられる概念的 (知的) 意味の相違はないが、主題 (この場合は主語) が異なるので、主題的意味の相違は存在する。

- (2.19) a. There *must* be peace and quiet. — [Newmeyer 1970] (平和と泰平がなければならない)  
 b. It *should* be borne in mind that there are some exceptions to every rule. (どんな規則にも例外があることを心に留めておくべきだ)

このように態中立性、形式主語との共起可能という特徴を備えた義務的用法の法助動詞も、また、その意味に命題指向性を内包すると言えるであろう。

#### 2.4. 法助動詞と時制

認識的用法の法助動詞は、文の命題内容が真である可能性／必然性／蓋然性についての話者の判断を表すが故に話者指向的であり、かつ命題指向的である。話者指向的な用法の法助動詞の意味は、当然、発話の場にかかわるもので、時という観点から見れば、発話の時点にかかわる意味である。それが用いられた

- (2.20) a. John *may* have been there.  
 b. You *must* obey your parents.

の場合、法助動詞が表す推量や義務はこれらの文の発話時における推量や義務である。他方、話者指向的法助動詞が従節で用いられた

- (2.21) a. John said that he *might* be wrong.  
 b. John said that I *must* obey my parents.

の場合には、法助動詞が表す推量や義務は、主節の主語 John の発話時における推量や義務である。主節で用いられた認識的法助動詞は、たとえ法助動詞の時制形式が過去形であっても、発話時における話者の推量を表す。

- (2.22) a. John *might* have been there. (ひょっとしてジョンはそこにいたかもしれない)  
 b. It *could* be true. (場合によっては本当かもしれない)

他方、話者指向的でない動的用法や非遂行的義務的用法の法助動詞は現在形で用いられた場合には現在（発話時）の法性を表すが、過去形で用いられた場合には過去時の法性を表す。

- (2.23) a. She *can* play tennis very well. [現在の能力]  
 b. He *will* have his own way. [現在の強い意志]
- (2.24) a. She *could* play tennis very well when she was young. [過去の能力]  
 b. He *would* have his own way when he was young. [過去の強い意志]
- (2.25) a. I *can* watch TV whenever I want to. [現在の許可]  
 b. When I lived at home, I *could* watch TV whenever I wanted to. —  
 [Swan 1980] [過去の許可]

以上に見たように、法助動詞が表す時に関しては、話者指向的であるか否かが法助動詞を二つの類に分ける。すなわち、話者指向的な法助動詞は発話時（間接話法の被伝達部（従節）中では主節に示された発言者の発話時）の法性しか表せないが、話者指向的でない法助動詞は発話時だけでなく、過去時の法性も表すことができる。なお、

- (2.26) a. *Must* I come again? (私は再度来なければなりませんか)  
 b. *May/Might* I use this telephone? (この電話をお借りしてよろしいでしょうか)

のような疑問文中の義務的法助動詞は話者指向的ではない。しかし、bの例からもわかるように、この場合は過去形であっても過去時の許可を表さない。これは、疑問文中で義務的法助動詞を用いた場合には義務の源は聴者となり（すなわち、「聴者指向的」<sup>5)</sup>となり）、話者指向的法助動詞の場合と同様、発話の場にかかわる法性しか表せないからである。

## 2.5. 法助動詞の意味と発話の意味構造

法助動詞の意味特性の考察の締めくくりとして、この節では法助動詞の意味と発話の意味構造の関係を考えることにする。一つの文を意思伝達場で発した場合にその文が聴者に伝える情報を「発話の意味」(utterance meaning)と呼ぶとすると、発話の意味は序論でも触れたように、命題態度と命題(内容)の二つの部分から成る。一つの文の発話の意味を命題(内容)とその他の意味の二つの部分に分ける分析は、Searleの発話行為の分析にも見られる。Searle(1969)は一つの文の発話の意味は発話の力(F)と命題(P)から成るとして、その一般式を  $F(P)$  と表す。発話の意味を命題態度と命題に二分する分析と、Searleの分析における「命題」の部分が同じものであるとすると、「命題態度＝発話の力」ということになる。法助動詞が表す法性、特に話者指向的な認知的法性と遂行的義務的法性は命題態度にかかわるものと考えられるが、これらの法性そ

5) 注3)を参照。



のものが発話の力であるわけではない。そこで発話の力と法性の関係を考えてみる必要がある。

発話の力と法性の関係を考察するに先立って、発話の力とは何かを明確にしておく必要がある。発話の力とは発話行為の中核を成す発語内行為 (illocutionary act) の意味効果を言う。発語内行為には様々な種類があり、個々の発語内行為はそれぞれ固有の意味効果、すなわち、発話の力を持つ。発語内行為は大別して、対人的発語内行為 (interpersonal illocutionary acts) と宣言的発語内行為 (declaratory illocutionary acts) に分けられる。<sup>6)</sup> 対人的発語内行為とは、〈陳述〉、〈質問〉、〈命令〉、〈約束〉、〈謝罪〉のように、当の発語内行為により話者が聴者に何らかの働きかけを行い、それに対する聴者の何らかの反応 (言語、行為などによる) を求める種類の発語内行為である。他方、宣言的発語内行為とは、

- (2.27) a. I christen this ship the battleship Missouri.  
 b. I appoint you chairman.  
 c. I pronounce you man and wife.  
 d. You're fired.  
 e. War is hereby declared.

といった例に見られる発語内行為のように、社会の制度や体制によって何らかの権威を与えられた話者が、(特定の、または不特定多数の) 聴者に命題が表す事態の出現を宣言する内容の発語内行為をいう。法助動詞が関係する発語内行為は対人的発語内行為のほうである。それゆえ、ここでは対人的発語内行為の発話の力を問題にする。

対人的発語内行為の発話の力は次に示す二つの部分に分析できる (なお、この分析は基本的には Searle (1979, Ch. 1), Bach and Harnish (1979), Fraser (1983), Allen (1986) などの説に基づくものである)。

- 1) 発話の目的 [意図] (illocutionary point [intention])
- 2) 命題に対する (話者の) 心的態度 (psychological attitude)

発話の目的 [意図] とは話者が遂行する発話行為の主眼点または狙いであって、たとえば、〈命令〉の発話の目的は聴者に命題内容 (が表す事柄) の実現を要求することであり、〈陳述〉のそれは命題内容が事実であることを聴者に知らせようとするものであり、〈約束〉のそれは命題内容 (が表す事柄) の実現を話者自らの義務として聴者に請け合うことである。他方、命題に対する話者の心的態度 [以下では、略して「命題態度」という] とは、発話の命題内容の事実性や実現について話者が持っている信念、願望といった心理的態度である。対人的発語内行為の類に属

6) Allen (1986, Ch. 8) の用語。

する発語内行為には、Searle (1979) および Fraser (1983) によると、基本的には次の四種類の心的態度が認められる。

- a) 信念 (belief): 命題の表す事柄が真(事実)であるという信念
- b) 願望 (desire): 命題が表す行為を聴者に実行してもらいたいという願望、またはそれが聴者によって実行されるべきだという当為的判断
- c) 意志 (intention): 命題が表す行為を話者自らが実行しようという意志
- d) 感情 (feeling): 命題が表す過去の事柄に対する話者の心情

そして、対人的発語内行為はこれら四種類の心的態度に対応する次の四種類のグループに分類できる。<sup>7)</sup>

- 1) 陳述表示型 (Representatives): 話者が発話の命題内容が真であるという「信念」を持ち、聴者にその「信念」を伝達し、命題内容が真であることを知らせることを発話の目的とするもの。  
(この型に属する行為を表す動詞の例: affirm, allege, assert, claim, declare, inform, maintain, predict, prophesy, reprot, say, state, tell, etc.)
- 2) 行為指導型 (Directives): 話者が命題の表す行為を聴者に実行してもらいたい(聴者が実行すべきだ)という「願望(当為的判断)」を持ち、その「願望(当為的判断)」を実現させるよう聴者を仕向けることを発話の目的とするもの。  
(この型に属する行為を表す動詞の例: ask, beg, command, demand, implore, instruct, order, permit, plead, prohibit, question, request, require, solicit, summon, etc.)
- 3) 行為拘束型 (Commissives): 話者が命題の表す行為を自ら実行しようという「意志」を持ち、その「意志」を表明し、行為の実行を請け合うことを発話の目的とするもの。  
(この型に属する行為を表す動詞の例: bet, bid, guarantee, offer, pledge, promise, propose, volunteer, vow, etc.)
- 4) 感情表明型 (Expressives): 話者が発話の命題の表す事柄に対して何らかの「感情」を持ち、その「感情」を聴者に表明することを発話の目的とするもの。  
(この型に属する行為を表す動詞の例: apologize, complement, condole, congratulate, deplore, greet, thank, welcome, etc.)

さて、法助動詞が表す法性は文の発話の力にどのようにかかわるのであろうか。陳述緩和的機能を持つ認識的法性は、当然のことながら、陳述表示型の発語内行為と関係する。発話の意味

7) これら四種類の型の各々に、具体的にどのような発語内行為が属するかについて詳しくは Back and Harnish (1979), Fraser (1983), Allen (1986) を参照。

は、上述の通り、「発話の力+命題(p)」と分析され、発話の力は発話の目的(IP)と命題態度(PA)から成るとすると、発話の意味の一般的内容は 'IP < PA (p)' という公式で表すことができる。<sup>8)</sup> 陳述表示型の発話内行為の典型である<陳述>(stating)の場合、その命題態度は話者の「命題内容が真であるという信念」であり、発話の目的は「その信念に基づき、命題内容が真であることを聴者に知らせること」であるので、この命題態度と発話の目的のそれぞれを、便宜上、'I BELIEVE (p)', 'I SAY to you (p)' と表するとすると、<陳述>(を遂行する)文の意味は、

(2.28) I SAY to you < I BELIEVE (p)

と表示することができる。具体例で示すと、次のaの文が<陳述>として発話された場合の意味は、(2.28)に基づくと、bのように表すことができる。

(2.29) a. John is sick.

b. I SAY to you < I BELIEVE (John is sick)

このような平叙文を用いた定言的(categorical)な<陳述>においては、aとbを比較すれば明らかな通り、命題のみが表明され(expressed)、命題態度と発話の目的は言外に含意(implied)される。((2.29.b)の{ }は発話の表明された部分を示すのに用いたもの。以下同様。)このような<陳述>の意味構造に法助動詞が表す認識的法性はどのようにかわってくるのであろうか。

(2.30) John *may/must* be sick. (=I believe it *possibly/necessarily* true that John is sick.)

(2.30)は、パラフレーズが示す通り、'John is sick' という命題に関してそれが事実である可能性/必然性があるという話者の判断(推量)を表すもので、ここでの *may/must* の意味は、<陳述>の命題の内容を成すものではなく、その発話の力に関係するもの(正確にはそれを修飾する

8) この公式は 'IP(p)' (命題を発する発話の目的) と 'PA(p)' (命題に対する心的態度) を結合したものの。IP と PA を結び付ける < という記号は、IP と PA の特別な関係を表す。PA (命題態度) は、IP (発話の目的) を生じさせる、広い意味での「動機」を成すものと考えられる。たとえば、行為指導型の PA 「願望」は話者が聴者にある行為をさせようとする IP の原因となるものであり、行為拘束型の PA 「意志」は、話者が聴者に何かすることを請け合うという IP の動機であり、陳述表示型の PA 「信念」も、命題内容が真であることを聴者に知らせるという IP を話者に抱かせる心理的原因である。<は PA と IP に介在するこのような「動機」の関係を表すものとして用いている。

もの)と考えられる。すなわち、(2.30)の発話の力を含めた伝達内容は 'I say to you that I believe it *possibly/necessarily true* that John is sick.' であり、定言的な John is sick. の意味表示 (2.29.b) と比較すると明らかなように、may/must の意味は、〈陳述〉の命題態度 'I BELIEVE p (true)' という「信念」を法的に修飾し、これを 'I BELIEVE p *possibly/necessarily true*' という内容に変えるものである。この内容を簡略化して 'I BELIEVE POSS/NEC' と表示することになると、(2.30) 全体の意味表示は、

(2.31) I SAY to you {I BELIEVE POSS/NEC (John is sick)}

となる。ここで注目すべきことは、命題態度が言外に含意される (2.29) と異なり、(2.31) で { } で示した通り、(2.30) では命題態度が表明されていることである。このように、認識的法助動詞は〈陳述〉の命題態度である「信念」にかかわる (それを修飾する) 意味を表し、したがって、この法助動詞を含む文の発話は、語彙によってある種の命題態度を表明しているということである。因に、陳述表示型の命題態度を表明する表現としては、認識的法助動詞以外に、次例に見るように、法副詞その他、様々な表現がある。

- (2.32) a. *Possibly/Perhaps/Certainly* John will come.  
 b. John came, *I believe*, later than Bill.  
 c. You are wrong, *I suppose*.  
 d. She is right, *to be sure*.  
 e. It is very cold, *indeed*.

「信念」が表明されず、いわば前提とされる定言的平叙文を発すると、命題内容の真実性について話者が確固たる知識 (証拠) を持っていて、それを断言するといった印象を聴者に与えがちである。これに対し、「信念」を修飾する (緩和ないしは強調する) 表現を用いてそれを表明する場合は、話者の命題態度自体を聴者に訴えかけていることになり、定言的平叙文を発した場合に与える独断的、断言的な印象を避けることができる。これは、*certainly, to be sure, indeed* のように「信念」を強調すると思われる表現を用いた場合にも当てはまる。認識的法助動詞や (2.32) に見る命題態度表現が、聴者との対人関係に配慮がなされなければならない会話の場で多く用いられるのは、これらの表現が持つ、このような断言的印象回避の機能に起因するものと考えられる。

ところで、命題態度を表明する表現 (以下略して「態度表明表現」と呼ぶ) を含む文の発話は、一般に、当の命題態度がかかわる発話内行為を遂行することが Searle (1975) などにおいて

指摘されている。<sup>9)</sup>

- (2.33) a. *I want* you to do it for me. <命令／依頼> [「願望」の表明]  
 b. *I intend* to try again. <約束> [「意志」の表明]  
 c. *I am sorry* I did it. <謝罪> [「遺憾」の意の表明]  
 d. *I am so glad* you won. <祝福> [「喜び」の表明]

義務的用法の法助動詞 *must* も、遂行的に用いられた次の例のような場合には、態度表明表現とみなすことができる。

- (2.34) You *must* finish your homework before you go out.

この場合の *must* は、外出する前に宿題をすませる行為をなすべきであるという話者の「当為的判断」を表す(行為指導型にかかわる)態度表明表現であり、それゆえ、(2.34) は<要請>(requirement) という行為指導型の発語内行為を遂行すると考えられる。ただし、(2.33) の態度表明表現と(2.34) の義務的用法の法助動詞 *must* の間には、それぞれの発語内行為を遂行する仕方に若干の相違が認められる。Searle (1975) によると、(2.33) の態度表明表現はそれぞれの発語内行為を「間接的に」(indirectly) 遂行する。(2.33) の各文は平叙文であり、遂行動詞を含んでいないので、これらの文の発話は、本来的には、<陳述>という発語内行為を遂行する。しかし、Searle によると、(2.33) の各発話は、それと同時に、(2.33) に示したそれぞれの種類の発語内行為を間接的に遂行する。このような「間接的発話行為」(indirect speech act 間接的に遂行される発語内行為に Searle が与えた名称) は、文の意味、場面からの情報、背景の知識などに基づいて、聴者がその発話の力を推論によって把握することにおいて遂行される。本稿の分析に基づき、言い換えると、(2.33) に示した間接的発話行為の発話の力は、表明された命題態度と発話の背景となる情報や聴者の知識に基づき、聴者が推論によって発話の目的を理解することで伝達されるということになる。これに対し、(2.34) が遂行する発語内行為<要請>は義務的用法の *must* に由来するものであるが、この行為は、(2.33) の場合と同じ意味で間接的とは言い難い。たとえば、母親が子供に(2.34)を発した場合と、間接的に行為指導型の発語内行為を遂行する *I want...*を含む次の文を発した場合を比較すると、相違は明らかである。

- (2.35) *I want* you to finish your homework before you go out.

9) ここでいう命題態度は、Searle (1969, 1975) で「誠実条件」(sincerity condition) と呼んでいるものに相当する。しかし、Searle (1979) では、Searle 自身も「誠実条件」から、命題に対する「心的態度」(psychological attitude) という呼び方に変更している。

(2.35)はまず一義的に話者の願望を聴者に伝え、次に聴者の推論を介して行為実行の〈要請〉という発話の目的が伝えられる。これに対し、(2.34)は話者である母親の「当為的判断」を伝えると同時に、その判断の内容を実行することを聴者に強要する(impose)機能を果たしている。したがって、遂行的義務的用法の *must* は、命題態度のみを表明するのではなく、発話の目的をも同時に伝える機能を持つと考えられる。発話の目的を表明する(明示的に示す)という点では、遂行的義務的用法の *must* は *require*, *demand* といった遂行動詞に類似しており、(2.34)は次の(2.36)に近い意味である。

(2.36) *I require/demand that you finish your homework before you go out.*

なお、*I want ...* のような態度表明表現そのものは行為の実行を強要する意味を含まないのに対し、遂行的義務的用法の *must* や遂行動詞 *require*, *demand* はその意味を含むということは、次のb, cが矛盾文であるのに対し、aはそうではないことからわかる。

- (2.37) a. *I want you to come, but you won't.*  
 b. \**You must come, but you won't.*  
 c. \**I require/demand that you come, but you won't.*

*I want you to come* は文脈により間接的に行為指導型の発話の力を持ち、行為の実行を強要する意を聴者に伝えるが、その意の伝達は聴者の推論を介するものであるので、(2.37. a)のような文脈ではその意は取り消され、矛盾は生じない。これに対し、*must* や *require*, *demand* は、遂行的に用いられると、明示的に(直接的に)〈要請〉の発話内行為を遂行し、(2.37)の文脈でも行為の実行を強要する意は取り消されない。したがって、(2.37. b, c)は行為の実行を聴者に強要しながら、それが実行されないことを予測する意となり、矛盾を生む。

Searle (1969) は、文の型、遂行動詞、音調などのように、それを用いることによって直接的、明示的に発話の力を伝達できる表現形式を「発話の力標識」(illocutionary force indicator)と呼ぶ。母親が子供に(2.34)を発した場合のように、遂行的に用いられた義務的用法の *must* は、上に説明した理由で、この発話の力標識の一種である。発話の力標識は、直接的発話行為において特定の発話の力を伝達することをその固有の機能とする。したがって、ある発話の力標識を含む文が直接的に何らかの発話内行為を遂行する場合、その発話の力は発話の力標識固有の意味機能に由来するものである。たとえば、*demand* という遂行動詞を含む文

(2.38) *I demand that you come.*

の発話の力<要求>は, demand という遂行動詞の意味機能に由来する。<要求>の命題態度は「願望」であり, ある行為を聴者に実現するよう求める発話の目的はその「願望」から生じるものである。この場合の発話の目的を, 便宜上, 'I DEMAND (p)', 命題態度を 'I DESIRE (p)' と表すとすると, (2.38) の発話の意味は次のように表示できる。

(2.39) {I DEMAND < I DESIRE (you come)}

(2.38) の発話の力は発話の力標識 demand の固有の意味に由来するものとする, その固有の意味の内容は, (2.39) に見るように, 'X DEMAND < X DESIRE (p)' ということになる。これ自体は略式の表示であるが, 語彙目録における demand の意味表示は概ねこのようなものであり, demand が (2.38) のような文において遂行的に用いられた場合, この表示のXがIに変わり, (2.39) に見るように, この表示全体が発話の力の表示へ変化する, と考える。同様に, 発話の力標識とみなし得る義務的用法の must が遂行的に用いられた (2.40.a) の発話の意味は, 行為指導型の発話内行為を遂行するものとして, (2.40.b) のように表示できる。

(2.40) a. You *must* come.

b. {I REQUIRE of you < I JUDGE NEC (you come)}

(2.40.b) は 'I require of you, because I judge it necessary, that you come.' の意を表す。ここでの 'I REQUIRE of you (p)' は (2.40.a) の発話の目的を, 'I JUDGE NEC (p)' は発話の目的の動機となる話者の命題態度「当為的判断」を表すものとする。遂行動詞を含む文と同様, (2.40.a) の遂行性は, 専ら, 発話の力標識 must の固有の意味に由来するものと考えられるので, (2.40.b) の発話の力を表す意味表示 'I REQUIRE of you < I JUDGE NEC(p)' の部分が must の固有の意味の, いわば, 一つのトークンであると言える。義務的用法の must の固有の意味のタイプ, すなわち語彙目録での意味表示, がどのような内容になるかは後に詳しく考察する。ここで注目すべきことは, 遂行的義務的用法の must は発話の力にかかわる意味を表すということである。

遂行的義務的用法の may も, 同用法の must と同様, 発話の力にかかわる意味を表す。この用法の may を含む文が遂行する行為は, <許可>であるが, <許可>も行為指導型に属する。ただし, <許可>は, 同じ行為指導型に属する<命令>, <要請>, <要求>, <依頼>, <禁止>といった, 聴者にある行為の実行を求める要請型の発話内行為とは, 次に説明するように, 若干性格を異にする。要請型の中で<禁止>は, 聴者に対する, 行為を実行しないことの要請である。たとえば,



- (2.41) a. You *must* leave.  
 b. {I REQUIRE of you < I JUDGE NEC (you leave) }

の発話内行為は〈要請〉であるのに対し、この発話の命題が否定的内容に変わった次の(2.42)のそれは〈禁止〉である。

- (2.42) a. You *must not* leave.  
 b. {I REQUIRE of you < I JUDGE NEC (you *not* leave) }

これに対し、〈許可〉という行為は、聴者が何らかの行為を実行したいと願っている際に、その行為の実行を話者が〈禁止〉しないという意向を聴者に伝える行為である。したがって、次の(2.43. a)のような〈許可〉を遂行する文の意味表示は、(2.42. b)の〈禁止〉の意味表示の発話の力の部分を否定した内容になると考えられる(なお、'〜'は否定を表す記号)。

- (2.43) a. You *may* leave.  
 b. {I ~REQUIRE of you < I ~JUDGE NEC ( you *not* leave) }<sup>10)</sup>  
 (= 'I don't require of you, because I don't judge it necessary, that you *not* leave.')

すなわち、〈要請〉—〈禁止〉—〈許可〉という三つの行為の間には、これら三つに共通する発話の目的、命題態度、命題内容を、それぞれ、IP<sub>R</sub>, PA<sub>R</sub>, Pの記号で表したとすると、次の関係が認められる。

- (2.44) a. IP<sub>R</sub> < PA<sub>R</sub> (p)                      <要請>  
 b. IP<sub>R</sub> < PA<sub>R</sub> (¬p)                      <禁止>  
 c. ¬IP<sub>R</sub> < ¬PA<sub>R</sub> (¬p)                      <許可>

aとcを比較すると明らかなように、〈許可〉は、〈要請〉の発話の力と命題の両方を否定した

10) 〈許可〉の命題態度は「立ち去らない(留まる)ことが必要だと判断しない」という当為的判断の否定だけでなく、「立ち去らない(留まる)ことを望まない」という「願望」の否定であることもあり得るので、(2.43. b)の意味表示には、厳密には、次のように、PA部分に「~DESIRE」を付け加える必要がある。

{I ~REQUIRE < I ~JUDGE NEC/~DESIRE (you *not* leave) }



ものということである。このことは、(2.41. a) が話者が聴者に「立ち去ることを要請する」意であるのに対し、この意味を「立ち去らない(留まる)ことを要請しない」というふうに否定すると、「立ち去ることを許す」という(2.43. a)の意と同義となることから裏付けられる。語彙目録で述べられる *may* 本来の意味表示がどのようなべきかの検討は後で行うとして、(2.43. b) に示した発話の力の表示は、発話の力標識としての *may* の機能を表すものであり、*may* の意味も、それが遂行的に用いられる場合には、発話の力にかかわるものであることを示している。

以上、法助動詞が表す認識的法性は発話の意味における命題態度を修飾し、その内容の一部を成すものであり、他方、遂行的義務的法性は発話の目的と命題態度の両方、すなわち、一つの発話の力そのものを規定するものであることを見てきた。これら以外の種類の法性、すなわち、非遂行的義務的法性および動的法性と発話の意味構造とのかかわりはというと、これらの法性は命題の一部を成すと考えられる。たとえば、

(2.45) You *can* park here.

の *can* を許可(の報告)の意の非遂行的義務的法性を表すものと解釈する場合、(2.45)の意味表示は次のようになると考えられる。

(2.46) I SAY to you < I BELIEVE {you ARE not REQUIRED not To park here}

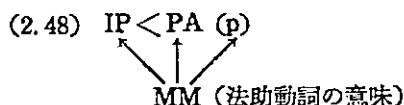
なお、許可の意を表す 'BE not REQUIRED not To ...' という表示は、要請(の報告)を 'BE REQUIRED TO ...' と表すとした場合に、(2.44)の発語内行為間の関係と同様、それと「逆対立」(inverse opposition)<sup>11)</sup>の関係にあるものとして捉えた表示である。非遂行的用法の *can* の意味は、(2.46)に見るように、<陳述>という行為を遂行する発話の命題内容の一部を成す。動的用法の法助動詞の意味も同様で、この用法の法助動詞を含む(2.47. a)の文の発話を持つ発話の力は<陳述>であるので、動的用法の法助動詞の意味はその発話の力には関係せず、(2.47. b)に示すように命題内容の一部を成すとみなさなければならない。

(2.47) a. It *can* be done.

b. I SAY to you < I BELIEVE {it is POSS(ible) to do it}

11) Leech (1974, Ch.6) の用語で、 $x(\sim p) = \sim y(p)$  または  $\sim x(p) = y(\sim p)$  の関係にある述語  $x$  と  $y$  の間の意味上の関係を表す。この関係にある  $x$  と  $y$  の間には、さらに  $x(p) = \sim y(\sim p)$ ,  $\sim x(\sim p) = y(p)$  の関係も成立する。

以上に述べたことを要約すると、法助動詞が表す意味は、次に示すように、その用法に応じて、発話の意味構造の三つの部分のいずれにもかかわりを持つ、ということである。



したがって、法助動詞の意味の分析には、これまでの各節で述べた特性に加えて、このような発話の意味構造とのかかわりを十分に考慮に入れなければならない。(未完)

#### References

- Alexander, L. G. (1988). *Longman English Grammar*. London & New York: Longman.
- Allen, K. (1986). *Linguistic Meaning*. 2 vols. London & New York: Routledge & Kegan Paul.
- Back, K. and Robert M. Harnish (1979) *Linguistic Communication and Speech Acts*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Fraser, B. (1983) "The Domain of Pragmatics". In J. Richards & W. Schmidt (eds.) (1983) *Language and Communication*. London & New York: Longman, pp.29-59.
- Leech, G. (1974, 1981<sup>2</sup>) *Semantics*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Newmeyer, F. J. (1970) "The 'Root Modal': Can It Be Transitive?" J.M. Sadock & A. L. Vanek (eds.) (1970) *Studies Presented to Robert B. Lees by His Students*. Edmonton and Champaign, pp.189-96.
- Palmer, F.R. (1974) *The English Verb*. London: Longman.
- \_\_\_\_\_ (1979) *Modality and the English Verb*. London & New York: Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London & New York: Longman.
- Searle, J.R. (1969) *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_ (1975) "Indirect Speech Acts". In P. Cole & J.L. Morgan (eds.) (1975) *Syntax and Semantics* 3. New York: Academic Press, pp.59-82.
- \_\_\_\_\_ (1979) *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Swan, M. (1980) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Van der Auwera, J. (1980) *Indirect Speech Acts Revisited*. Reproduced by the Indiana University Linguistics Club.